

組織にこめられた革命性

石川 玄 造

(1)

ごくふつうの会社を例にとってみよう。その会社に働くひとり
の社員には、業務上の役割が与えられており、他の社員が担う役
割と結びついて会社の仕事をやりとげる。会社にとっての目的は
会社の組織の網の目をくぐって達成される。しかし社員の目的は
いうのはよほどの偏執狂でないかぎり、与えられた仕事をこなす
代償として賃金をもらおうというところにあるわけだから、自分が
今、やっている仕事が会社全体の中でどのような役割を果たすのか
と考えることは二義的なことである。そしてその仕事が毎日やり
なれたものであればあるほどその社員にとって会社の意志とは切
り離された彼自身の意味しか持たないですますことのできるこ
とである。

では一方、政治運動のように代償を求めないような組織的な行
動の中の個人はどうだろうか。運動にはある政治的な目的があつ
て、それを実現するために個人にある役割が与えられる場合、人
はその役割が全体の中でどのような意味をもち何を期待するの
かを考えながら行動するだろう。そして、もし、目的と今、与えら

れた役割とがその人のうちがわでうまく整合しないときにはそれ
なりに目的からの疎外を感じざるをえない。例えば革命をめざす
組織のうちで強奪を指示された男は目的と手段との間の乖離を感
じ、自分の行為を合理化するために煩悶しなければならぬ。そ
んな極端な場合でなくとも目的が現状と遠くかけはなれていれ
ばいるほどそれを達成する過程が目的が描く姿とどのように結びつ
くのかわからなくなるといふことは全くありうることである。

カミュはこういふ問を發する、「正義の理想のために愚かしさ
に賛同せねばならないのだろうか？」^ノ諾ならば立派である。否^{クイ}
ならば正直である。

少しのあいだでも政治運動にかかわった人なら、この選択支の
前でたちどまった経験があるだろう。わたしだってその例外では
ないが、悪のりを承知でいえば、わたしは正直である自信はある
が立派である自信はない。同時に人に正直でないことを責めるこ
とはできるが立派でないからといって責めることはできないよう
に思う。

わたしたちは正義の理想に燃えながらも組織の重さにたえかね

て足を洗う。もつと自分をよく納得させることのできる組織のあり方はないのだろうか？

(2)

安保拒否百人委員会の坂井さんがバザーについて書いている。

「資金があつまるのは良いことにちがひありません。でも私たちのようなグループはなにかひとつやるにしてもそのやり方はいたるまで未来性をこめていくべきではないでしょうか。この世にはないが、やがてそのようになるべきものの形、姿をひとつひとつの方法、やり方の中にさぐり、たとえ試行錯誤のひとつでもいいから残していくべきだと思います。つまりバザーが成功したかどうかを金額と利益の大きさにだけ求めるのではなく、そのバザーをすることによってどんな人間の結びつきが生れたか、どんな共同性が人びとの間に残されたか、ということも合わせて考えていくべきだと思います。」(七三・十二「すわりこみ」十三号)

運動の中にいる人びとが手段そのものの中に意味をさぐり、行動全体の意味を豊かにしていく、あるいは運動の主体をきたえていくということは、目的を達成していく過程を機械的に、機能的にこなしていくこうとする姿勢からはでてこない。坂井さんは、手段を有効性の尺度で選択していかない。

政治党派のうちでも、現在の社会の中に定着している組織的な手段を肯定している保守党派や改良主義的な党派にとってはその目的を達成するために採られる手段の中に未来性をこめるといふ意義性ははじめから除外されている。彼らにとって重要なのは結果だけである。いいかえれば彼らの政治的な行為は国家の意志を

構成するひとつの分子にすぎず、国家の構造をささえる一本の柱である。ここでは組織はより効果の高い機能性を発揮できるように組織された意志のビュロクラシズムに限りなく接近していく性が向が認められるだけである。

わたしたちはビュロクラシズムの中に自分の組織的な行為をよく納得させることを期待することはできない。

(3)

では、これに対して自ら「反体制」を標榜する社会主義者の党派の組織のあり方はどうだろうか。彼らは資本主義的な人間関係、自由に対する反対者であり、政治体制を根こそぎ改善しないかぎり自分たちの究極の理想は実現しないのだという確信を抱いている。彼らは理想の実現の契機を政治革命に求め、そのために戦略と戦術を措定する。単純化していえば革命を志向する思想集団がその実現の手段として△党▽を媒介にして現実の政治に直接、間接に働きかける実存となるわけである。具体的には日本共産党的ように労働組合や市民団体に働きかけたりしてその意志を議会に反映させようとする方法もあれば、徹底的にかつ直接、権力に対する破壊者として自己を実現しようとする党派もある。いずれにしても手段は目的に完全に従属させられており、実際の政治的実践の過程から愚かしさを完全に拭払することはできないままである。つまり、目的こそ真向から敵対しているとはいえず、その手段は保守改良党派のそれと全くかわるところがない。それどころか規律の厳しさは保守党派の比ではないのだ。わたしたちはこういう組織の中では自分の意見はつねにおろかいかいをたてなければ

らず、たえず上にこびへつらつていなくてはならないのだ。革命とはいったい何だ？

(4)

革命が実現させなければならぬのは政治的・社会的を問わず一切の権力と権力的関係、権力的意志を廃絶した社会である。革命闘争とは従って、政治の分野に限定された対外的な闘いに矮小化されるべきではもともとなし。それは同時に社会的な闘いであり、なにより闘争主体の自己の権力的な意識と関係のあいだの闘いである。革命を今、このような視点から規定すれば何が革命と革命闘争に敵対し、最後まで抵抗するであろうかが全く明らかになる。またそれと同時に今、革命をめざす主体が何と闘うべきなのかよく理解できるのだ。政治的な権力さえ奪取すればあとは雪崩うつて全ては解決するという考えは甘いというべきではない。それは誤謬なのだ。ブルジョワ的な権力のあり方が誤りなのであってプロレタリア的な権力は正しいのだ、と共産主義者は考えている。彼らは目的さえ正当であれば権力は自分たちに害をもたらすものではないと考えている。

絶対自由主義者は違う。絶対自由主義者は一切の権力を認めない。国家は廃止すべきものだ」と主張する。

プロレタリア独裁を認めるかどうかという問題は当事者が考えていたほど理論的な問題ではない。それどころかより深い対立、すなわち思想的な対立を浮き立たせる。理論的な問題として資本主義から社会主義への革命的転化の時期には政治上の過渡期が存在する、ということはいわば自明のことである。その政治上の過

渡期をどのような政治構造によって運営していくかはそれこそ当事者のきめることであつて、先験的に共産党の中央集権的な官僚組織がブルジョワ政治権力にとつてかわることがきめられているのではない。

それにしても絶対自由主義者にとつて打倒廃絶の直接的な対象である国家権力を共産主義者がブルジョワジーを駆逐するため存分に利用すべきだと表明している以上、論争はあらためて革命そのものをめぐる論争として展開しなほさなくてはなるまい。

(5)

さていよいよ本題に入ろう。この小論の意図は共産主義者のあいだに広く定着している中央集権的な組織と絶対自由主義者があまりにもしばしば主張するところの自由連合主義的な組織とを対置させて、どちらが来たるべき革命を決定的に成就させる力を持っているか、あるいは革命にとつて有効であるか、または親和性をもっているかを論じようとするところにはない。かのコンベンディット兄弟の「左翼急進主義」が中央集権的な組織論にくわえた批判は組織の機能性、効率、または秘密の保持性、組織自体の強度そいつた尺度で優劣をおしはかろうとするきわめて合理的・実用主義的な水準にとどまつている。むしろ、彼ら兄弟はその水準ですら、中央集権組織の長所と信じられていたさまざまな特徴を実証的にくつがえし、説得力のある批判を構成することに成功している。体験的にいえばこの手のブラグマチックな論理展開が論敵、この場合は共産主義者だが、を完慮なきまでに粉碎する最上の方法だということはいわゆる自明の理、最上の合理精

神が真にラディカルな革命精神と究極的に合致するというのは全て疑しいことだと言わなければならない。わたしは中央集権的な組織論への批判の手法として彼らのあとを再びなぞることはしたくない。わたしはもつと原理的な問題としてこれを解析してみる。

実際、このふたつの組織論のきわだつた理念の対立は双方の長所、短所をあげつらつて選択をせまったり、趣好のもんだいとして投げだされるべきささいなことではない。

わたしの考えでは中央集権主義と自由連合主義は革命に導くふたつの毛色のちがった手段ではなく、共産主義と絶対自由主義の革命観の対立そのものの具体的な表現なのである。今日まで、革命がもたらす社会は、人による人の搾取のない、政治的な抑圧と不平等が一扫された自由な社会というようない方のなかにイメージされていて、そのことに限っていえばまずまじめな社会主義者のあいだで異存のない一致した見解であるにもかかわらず、その過程にプロレタリア独裁を認めるかどうかで激しい対立があるのだ、ということになっていいる。ことわっておくがこの構図の中には資本主義的生産様式は一義的に社会主義的生産様式に転化するというあの唯物弁証法的歴史観が介入する余地はない。それは政治上の問題であり、また、革命家の想像力の問題であるからである。

ところで、社会主義運動とは、また革命運動とはそういう一種の理想社会を実現するための運動であると規定してよいのだろうか。もしそうならわたしたちはここで再びカミュの設問に出あい、答を選択するという誤まりを犯さねばならなくなる。革命観の対立を云々するまえにまず、この問題を片づけよう。わたしは「正

直である」ことに甘んじない。わたしはカミュを逆倒する。正直であろうとすれば愚かしさに賛同などしない。したしだからといってそのことは正義の理想を放棄してしまふことにもならないのだ。逆説的にいえば正直であろうとする意識の根柢こそが革命を自己の側にひきつけ、革命運動を内的に支えようとするのだ。そしてこの際、愚かしさとセットになった正義の理想はもはや理想の名に値しないのだとあえてつけ加えておこう。

(6)

一般に信じられているように目的が手段を正当化するという場合、つまり正義の理想が愚かしさを正当化するという場合、愚かしさが現実にもたらす正義の理想との起りうべき矛盾はそのまま放置され、自己増殖するがままにまかせられる事態を共産主義者たちは平気で看過する。手段がもたらす結果が目的との乖離を生じ遂には目的と敵対する運動へと転化する危険を彼らは防ぐことができない。当事者のいい分は常に自己の行為の合理化に終始している。わたしたちが醒めた目で事実を見すえたとき、この危惧は現実となつていいる。現実のソ連、現実の中国をもたらしたものは何か。それは彼らの指導者が採用した手段、実践そのものである。彼らが究極に思い描いている理想ではない。そこにはすでにブルジョワジーは存在しないが強固な政治権力が維持され、人民は自由な言動を封ぜられ、自ら組織するのではなく組織させられ、そのかぎりで搾取されている姿があるだけである。

革命と革命運動が目的論的に規定されるかぎり、それを主張する集団にとつてその実践は正しい。従つて革命を主張する人の数

と同じだけの正義が成立するわけだ。今ではその理想もそれぞれ相対性の中に陥ちこみ、色あせ、安つぼくなつて人民をひきつける魅力を失つてしまつてゐる。そして、だれの目にもおつしやることは立派だがやつてゐることがちぐはぐでいけねえ、という素朴な批判に対してうなだれるほかないような現実がゴロゴロしてゐるわけだ。当事者以外にいつたいだれが昨今とみに華々しい中核派と革マル派との戦争状態を革命運動の過程の不可避な闘争なのだとして理解するだろうか。全く冗談ではないのだ。

(7)

さてもう一度、提起した問題にたちかえらう。理想社会を思い描き、その理念に敵対する現実と闘い、自らの闘いのうちに理想社会の原基を育てていくという姿勢自体は今のところ批判の対象とはならない。しかし、この目的論的な政治実践の前途には常におちこみやすい陥し穴がひかえてゐる。それが綱領のかたちで黨員の前に明らかにされる場合には黨員はすでに陥し穴の中に片足を踏み入れたも同然である。綱領は目的の重層的な構造である。それは時間のピラミッドであり、上位の目的は下位の目的を従える構成になつてゐるが、上位の目的は下位の目的より抽象的・理念的な性格を持つてゐる。現実の政治実践は当面の目的の実現のために闘われるが、その目的は究極の目的から疎外され、外的な現実と主体的な力量に強く規定されるために実際の過程と結果を分析してみると、もし彼らの綱領が手許になければいったい誰がどんな目的をやつたのかわからないような結果が顕在化する。それはわかりではない。綱領は綱領でそれが明文化されるやいなや不可

避的に反対党派の批判にさらされ、その絶対性、唯一性は客観的には多数の正義の中のひとつに甘んじなければならなくなる。そのため綱領党派は当面の実践過程で共闘関係をつくりあげることができても、いつの日にか綱領の相違の故に互いに敵対しなければならなくなるだろうと確信せざるをえないのである。そして何よりも綱領党派をきわだたせてゐるのは目的至上主義の背中に張りついている手段それ自体は無価値であり目的と結びついてはじめて意味をもつという考え方である。彼らにとつて八暴力√は不正な目的に用いられる場合を除き、その使用をさまたげる理由はない。この考え方を最も露骨に主張しているのが毛沢東である。その二元論はあまりに徹底していてグロテスクですらある。曰く、正義の戦争と不正義の戦争、正義の核兵器と不正義の核兵器、正義の国家と不正義の国家……。いうことないよ、このバカ。それもこれも目的至上主義者たちが革命をはるかかなたの、この手で拒むことのできない理想だと考へてゐるからだ。つまり、現実の政治実践過程はその理想を実現するための手段なのだと思へる革命観に依拠してゐるからだ。

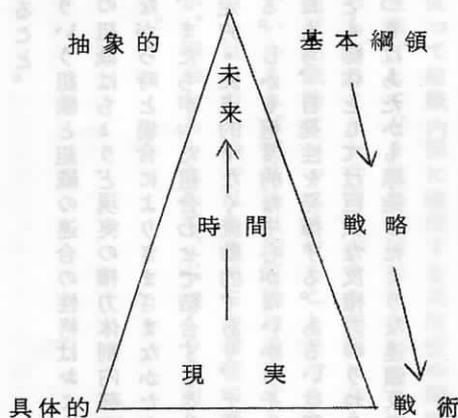
(8)

中央集権的な組織の構造はこの目的至上主義に対応してゐる。組織の目的は常にピラミッドの頂点から底辺にむかつて下放され、現実である底辺でさまざまな分野で実践に移され、その成果が再び頂点に向つて還つていく。成果はもし最初めざした目的とそぐわないと判断されれば、その闘いがいかに革命的なものであつても容赦なく切捨てられる。目的が常に傷つけない安全地帯にある

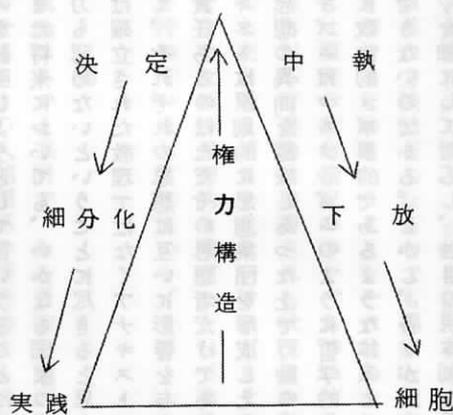
ことが中央集権的な組織の本質的な属性であるのだ。現実の闘いを擁護するものは党が掲げるところの即目的な目的以外になにもない。トロツキーは自分の組織、中央集権的なボルシェヴィキの党、がいかに柔軟性を欠いた役立たずのものであるかよくわかっていた。「貧血症の、思いあがつたインテリゲンツィアは……民衆を教育しようという気持ちに燃えていた。……だが、インテリゲンツィアは民衆を理解し、民衆からなにごとかを学びとるといふ能力が絶対的に欠けていた。ところでこの能力を欠いたとき、革命的な政治というものは存在しないのだ。」いわずもがな。だが、中央集権的なこの、目的至上主義の党は、たとえひからびすでに役立たずになつてしまった目的でも、それがあるかぎり、現実に優先させなければならない。なぜなら、党は、現実より、目的の正しさを信じているからである。

(9)

もし、目的を時間軸の方向に組みたてず、空間に設定すればどういうことになるだろうか。いいかえれば目的を手段としての組織の中に反映させるとすればどうなるだろうか。この設問に対して、目的至上主義が形成される理論的な根拠、すなわち、共産主義社会の実現は弁証法的な歴史展開を経てはじめて可能であるという、時間軸と無関係なところでは革命論も組織論も成立しないという前提にたてばこの設問ははじめから成立しない。しかし、政治的・社会的な関係の輻輳的な展開が経済的な実態と諸関係と相対的に独立した原理に基いているという認識にたてばそのような組織論は理論的な正当性を保証される。また、現に生きている



目的至上主義



中央集権主義

諸個人の望むあるべき人間関係―社会関係の原理を革命運動の内に反映させようとするのが現実の権力体制の原理をおびやかす思想的な力をたずさえていけばそれはまさしく革命運動と呼ばれてしかるべきものであるだろう。第一、運動が前もって準備された戦略によつて規定されていなければ先が見えていると批判することは、未来社会がどうなるかと、今、現に抑圧され、搾取されている自分の状況を手をこまねいて見ているわけにはいかないと、いうような衝動によつて支えられた闘いを外からとやかくいって、ここで闘いの当事者には無意味なのである。ここではただ、気まぐれで手段が目的そのものと融合するような組織のあり方を追求することをやってみようじゃないかといっているわけではないのだということを確認しておくことにしよう。

革命を組織論との関係で定義すれば、前述したように政治的・社会的であることを問わず一切の権力と権力的関係、権力的な意志を破壊することであると集中的に表現することができる。この意志を組織論に反映させるというまでもないが組織内における権力関係は排除され、そのかわり、組織意志決定の際の完全な直接民主制、実践系統における自発的な協調、実践における連携、さらに組織意志に同意しない同志の実践への不参加の承認などが原則として導入される。これらの内的条件を完全に充足させるためにはいくつかの外的条件が必要である。すなわち、組織の大きさはある程度小さいこと（せいぜい十数人だ）。従つて数をたのみの大衆的な行動を組織するときには同じ構成をもった組織との連携と役割の分担が要請されること。また同時にひとつの組織だけが可能なことがらは殆んど即自的な行動に限定されることを前提

とすること。

こういふ組織と組織の連合の性格はおよそ次のようなものだ。個々の組織はちょうど現実の権力体制内部の反権力的な一分子でありながら時と場合によりさまざまなかたちで結合しては再び分離し、またちがつた組合わせて結合することをくりかえす。従つて固定的・拠点的でなく流動的であり、ゲリラ的で柔軟性に富んでいる。しかも恒常的な中心がないからそれぞれが責任的な独立性をたもち、自発性を発揮する。あるいは個々の分子は無名のだけれども総体としては巨大な反権力のうねりを現出させる。その結びつきはあたかも感染したような連鎖反応を示す。

(10)

わたしはアナキズムについて語りうることは殆んどない。アナキズムを説明しようとして言うことはただアナキズムは地上の、また将来においても、いかなる国家の存在も否認し、いかなる権力も認めないということに尽きると思う。というのもアナキズムは確立された教理ではなくアナキストの教だけ存在するのであって、それぞれの思想は互いに影響を与えあうけれどもその思想に責任あるのはただその思想者だけであるからである。従つてアナキストは原則的に思想集団を形成しえない。そのかわり、互いの思想の異同を認識しあつた上で行動の連合を形成するだろう。アナキズムはマルクシズムのように哲学的であり経済学的であり、同時に政治的・軍事的であるような体系として自己をあらわすことができないのである。しかし、各々が置かれた状況の中で八反権力Vを軸にして対応し、独自の現体制の矛盾を暴露し、個別的

撃破の闘いを組織していくだろう。それはアナキズムの意志において委任しあうことである。そういう連携がはじめていけばマルクシズムと名実ともに対抗できるとわたしは考えている。

(11)

さて、ここで共産主義組織論―運動論と最もきわだつた対比を示す運動(形態)をとりあげてみよう。それは他でもない、非暴力直接行動である。共産主義の理念からは手段だけを目的からきりはなして考えることなど及びもつかないことであり、ましてその行動様式自体が意味を持つていることなどありえないことである。

共産主義の戦術、手段からみれば、暴力対決をとるか非暴力的対応をとるか、議会をとおしたり法律に依拠した合法行動をとるか直接行動をとるか、臨時機応変、こちらの主体的力量と人民の意識のレベルや敵の出方次第ということになるはずである。そこには手段採用の基準として現実有効性だけが見出だされるだけである。こういふ是非々主義によるひきまわしが権力奪取に成功することがないのはそれによつて困いこんできた組織の水ぶくれ的な膨張と欺瞞を防衛する意図に満ちていることと同じほど明らかなことである。

非暴力直接行動が優れているのは現実の政治過程における有効性においてではない。そうではなく、国家がその本性をあらわにする様式と非暴力直接行動とは原理的に敵しく敵対するという意味においてそれは真に過激であり、革命的なのである。非暴力直接行動が運動として機能する理由はそれに参加する人々にとつて

それ自身が目的であり、かつ手段であるからである。非暴力直接行動以外の方法はどんなものでも国家と親和性をもつことをさけることができないということそれはわたしたちに教えてくれる。わたしは現実の革命情況の中で、あるいはそれに至る過程で権力的な作為が不可避免的に要請される状況においてこまれることはありうることだと考えざるをえないけれどもその権力的な作為を構造化させないための思想的な歯どめとして非暴力直接行動は主要な意味を持つていると信じている。

(12)

組織論はふつう共同で、ある目的を達成しようとする意図を現実化させるときの人間関係の構造論として語られる。しかしそれは実はきわめて狭い意味での組織論であつて、本質的には人間のとりうる他の人間との関係総体を認識するものでなければならぬ。従つて組織内部に醸成する共同性の問題や、個別の特殊な関係を全体としてどう扱わねばならないかといった問題、組織の外部からもちこまれた共同性がその組織に与える影響……そういった問題は組織論にとつてさけることのできない本質的な課題である。いいかえれば組織論は国家論に通底する。

わたしはこの小論ではあえてこの最後の課題を捨象して語ってきたが、機会をあらためて、じっくり検討していくべきだと考えている。

(一九七五・四・五)